



閑田次筆

廿五号



山

三四

15
1543
2止



荆川先生集卷之二

性靈集

詩
偶
集

常にシャウレウ集とて其

素徒ハ素續タルヲルセイレイト漢音ニナシ是佛書

にうらふゆゑとぞ、おもて
披露せられ、うゑえ

つるぎふよしとて客家の学力あるは師の張をり

○同 張子性靈集と編くもの真濟僧正の作

のふ足なりまうは此真濟僧ふのふと元亨釋書

に深殿の后は恋慕して鼻中の魅となれりと云

上と出たり、何と出たりと云ふ不接竟末に

そ人のいふもなるふ陸奥仙臺の比門梅園といふ

博覧の人乃性靈集を讀むに便哉と云ふを衣

の説述に俳志といふべきはなりきものなりとて
か他に採らず釋書もこれに基きたるべしといひ
て平みりて凡え釋書なる無稽の事ありとて
之を以て愛云の天帝に祈禱して雷に成るべし
ありけり後小角の葛城の橋と言ふことの神にあ
らへりといふもありやとて不審とすといふは傳
説の誤のうちに記さるあり凡そ其意旨のなるに
いはしき案鑿を及ぶべしといひ彼等他家の所記に
あはても違ふことありやとて儒阮の語せしむと
又此釋書なりと不穩^{ミラス}助語をぬき明王玄才及
盧安堂といふ儒者難くたること皇明張美頌とい
ふふありといふ人いふ

○古今集の或はよゆく大師の言ふと奥雅儒
正も業平朝臣の児童なりけり其美兒にみぞ
とていふことたのむるものなりとて今集と
といふ説あり可尋と記せりといひ古今集と
いふくといふものなりけり何よりて他者とて
あやうの語をとりてん可尋といふべしとて
たふふといふことたのむるものなりとてか
やうの俗説いふことありとて

○故く海棠賣茶のまじりたる折骨とて
まじりたるそれい茶^タ毗^ヒとて骨と折^ツ碎^キとて河
へ流さるるものなりとて國つらうとて其のら
海棠もくく病て身もろりなりといふも

倣ひて「このむぎ」は析骨ありて擽のなりといふ
言をゆかり火降して河へ流し其なる後
さうして生るなり擽一本を植ふといふ
ぞ然るは此析骨といふと「あるもの」尋同
さうくさうさういふに續崎人傳に海棠が小傳を端
に書し「ゆもさねぬ」と記して止むにさうい
ふさうして黄蘗人眉和尚の傳をとりさういふ
「ふ擽骨のさういふ」と正字通も「正」ふ擽
字の下のはな云同擽韓愈刪盧仝月蝕詩星
如擽砂出擽集爭強雄といふと引ふ擽字は
音薩側手撃也公羊傳宋萬臂擽仇牧又韓
愈為孟郊墓誌惟其大斲千辟而與世抹
斲

註掃滅也古通用末殺云云此諸説を合せ考つる
碑の意さうと又掃滅といふも碑ふりの轉れ彼擽骨
も火降して骨の粉になつてさういふん然る碑きて
河へ流さるゝ義ありあつてこれ擽骨といふ
に河へ流さるゝの義ありと誤り傳へてさうい
文字も折と誤りさういふれさういふて唐山の
碑院をさういふ常ふつとさういふ中のも心
にくれんもさういふさういふ見聞をさういふ付冥加
を蒙るゝと自喜す
○或人云葉のぬりて難なるものふ用ゝ鏝のぬり
るゝ鏝のぬりて鏝いさういふはさういふ鏝も戸張る
たをさういふさういふもの

○字義にひいてあるなりなり又ふ合せ
 よもよりたぐは儀字の説に去をさるるに
 以酒食送るにても詩經邶風の邶に
 道祖神とありて後其側^{カタハラ}に飲ともあり
 然るにやうに此字さうのさるるに説文
 の去をさるるに食ふ從ふ字義と訓は
 大に異なり馬の鼻むけに旅に人乃馬の
 鼻のうへにさるるに或説に
 馬乃鼻むけにさるるに如無けや
 といふにさるるに道にやうにさるる
 といふにさるるに旅にやうにさるる
 も酒食をさるるに用ふにさるるに

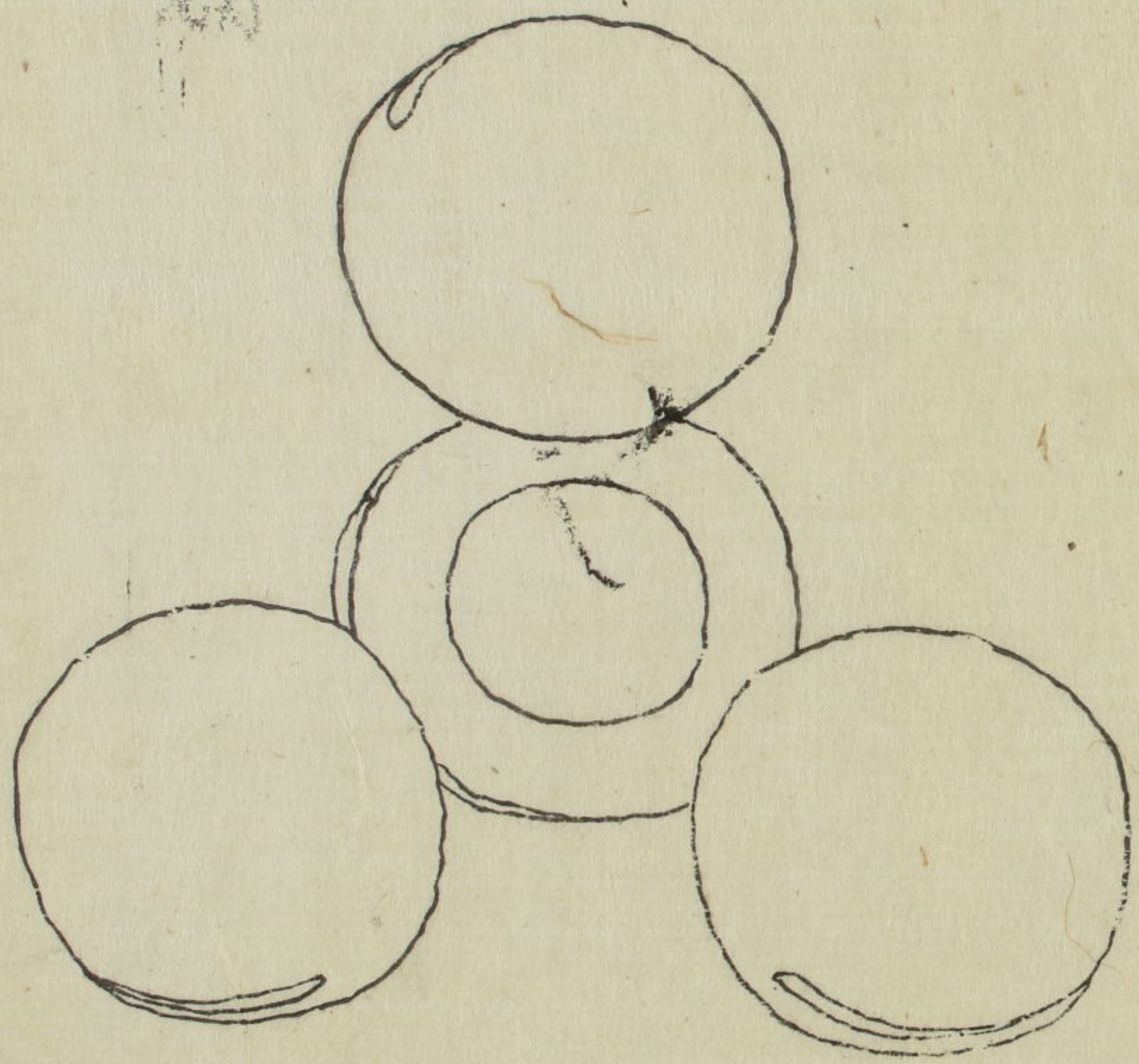
輓歌^{ヒキ}同いこつに^{ヒキ}挽を^{ヒキ}挽くといふに
 が故事よりいふにさるるに哀傷の詩なり
 其集も是と輓^{ヒキ}と題し是の類もふはさるる
 といふ

○こゝに音義に曉る元來獨學の樂なり
 乃ふにさるるに國つてさるるに
 も他人の遠東のいふにさるるに史記貨殖傳に
 吳楚七國無起時長安中列侯封君行從軍旅
 齋^{スモヒク}貨子錢々家以為矣邑國在關東關東成
 敗未決莫敢與唯無鹽氏出捐千金^{スモヒク}貨其息什
 之索隱初齋^{スモヒク}貨と註し云齋音子替反セイ
 貨候也音吐得反トク後千金下の貨と註す

或吐代及タイ。正字通と考ふ小感度耐切音代。假
質無息為賦。有息為賦。と云ふなり。吐得音義を
候の字注も。字典にいたるをふくむ。考つる
及ふ。吐得及音義のつとを考へ。記置棠陸の
へ。今も唯うて。うは。トク。と。ハ。タイの音と云ふ。さ
の。頼耕。祿。は。陰。字。の。紙。を。傍。に。置。て。觀。て。學。ぶ。奉。字
ハ。薄。帝。と。も。本。書。に。覆。ひ。て。予。と。用。ゆ。一。つ。の。文
譯。文。笠。蹄。に。取。違。へ。と。書。れ。り。や。或。人。見。出。り
に。あ。復。徠。氏。と。考。へ。り。と。人。家。の。空。み。だ。く。海。と。
且。豪。傑。の。人。と。詒。も。入。ま。う。る。例。も。一。つ。老。院。色
と。轉。例。と。琵琶。と。は。あ。る。顔。に。あ。り。あ。れ。る。詩
あり。と。又。或。人。い。ふ。に。さ。

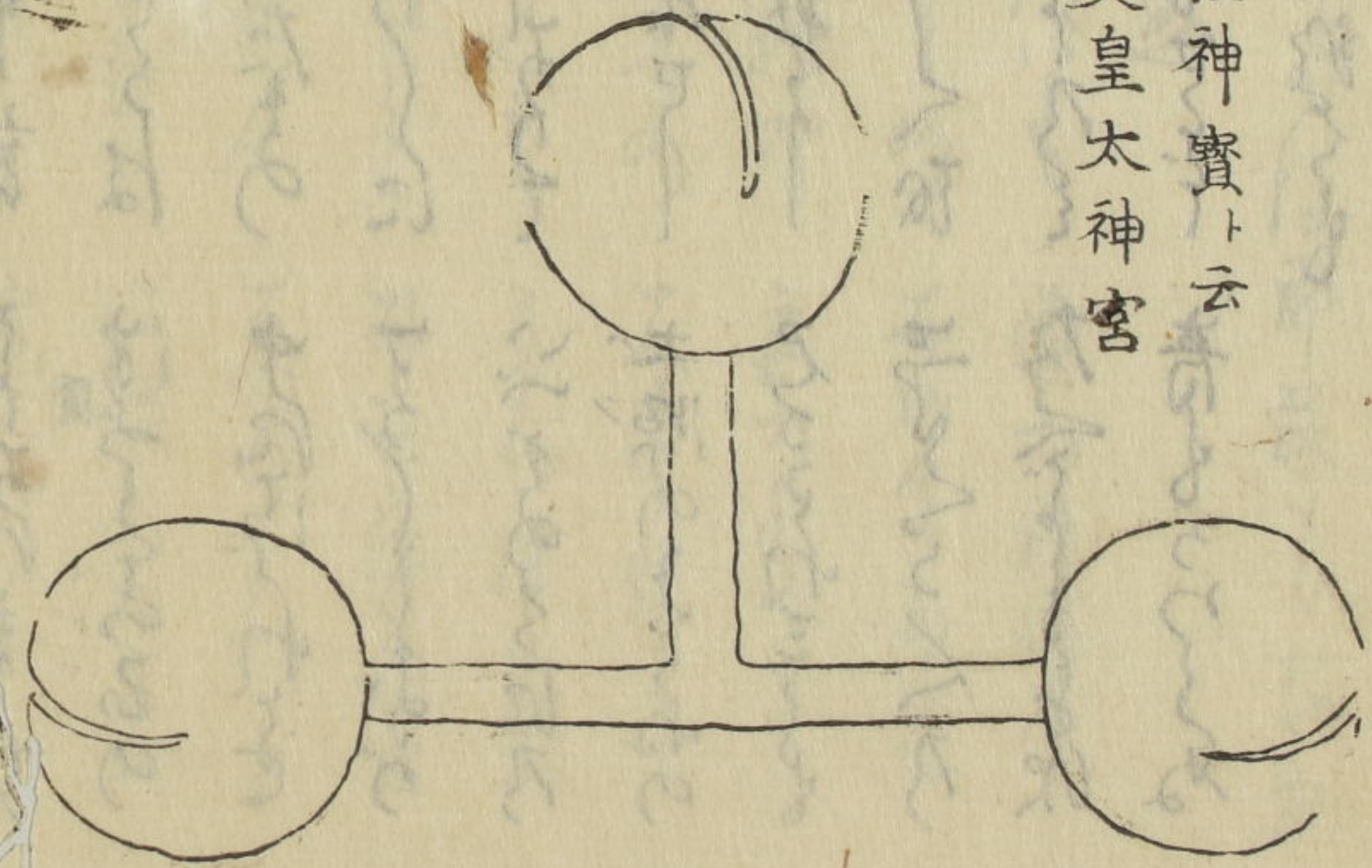
○世にけり基焼る。一説の。う。と。一。説。あり。席。ふ。居。
用。ふ。と。う。と。う。の。茶。碗。の。骨。を。細。く。あ。ら。わ。れ。り。と。釘。ふ
つ。て。花。を。挿。料。を。ふ。用。と。考。へ。り。と。人。家。の。空。み。だ。く。海。と。
この。頃。あ。る。人。話。と。陰。奥。監。電。明。神。の。神。宿。に。如。般
の。臺。に。り。つ。と。人。神。酒。を。奉。る。説。と。い。つ。り。は。こ。小。酒。と
い。つ。り。奉。る。時。新。お。は。ら。ぶ。と。考。へ。り。と。人。家。の。空。み。だ。く。海。と。
あ。り。け。り。臺。と。居。る。と。尻。の。居。る。と。考。へ。り。と。人。家。の。空。み。だ。く。海。と。
ふ。り。用。ふ。充。び。の。證。と。い。つ。り。と。按。ふ。に。忌。免。の
あ。ら。わ。る。と。万。葉。集。の。と。考。へ。り。と。人。家。の。空。み。だ。く。海。と。
と。い。つ。り。も。あ。る。と。考。へ。り。と。人。家。の。空。み。だ。く。海。と。
う。め。り。と。う。と。う。の。行。基。焼。も。此。考。へ。り。と。人。家。の。空。み。だ。く。海。と。
臺。へ。入。り。土。中。に。埋。む。と。考。へ。り。と。人。家。の。空。み。だ。く。海。と。

理いふくしきうつやにれど大うそそ形も酒殿の趣
 ○此丹方より金子氏の古箋物なる画の影り
 数物とよき集めて并て所共中ふ和泉國
 大島郡百瀨村より堀をとりて入るに
 此よりりの土師式祖野見宿禰の宅地より東に
 及正天皇の陵西に履仲天皇の陵ありとに徳天
 皇の大仙陵も近し宿禰の社もその趣くふあり
 まうれい其代のお成りといふり力敏勢もにりし
 うやまは錆腐りて欠損ト唯此鈴のそ今も存と
 とおき即圖にうつす事



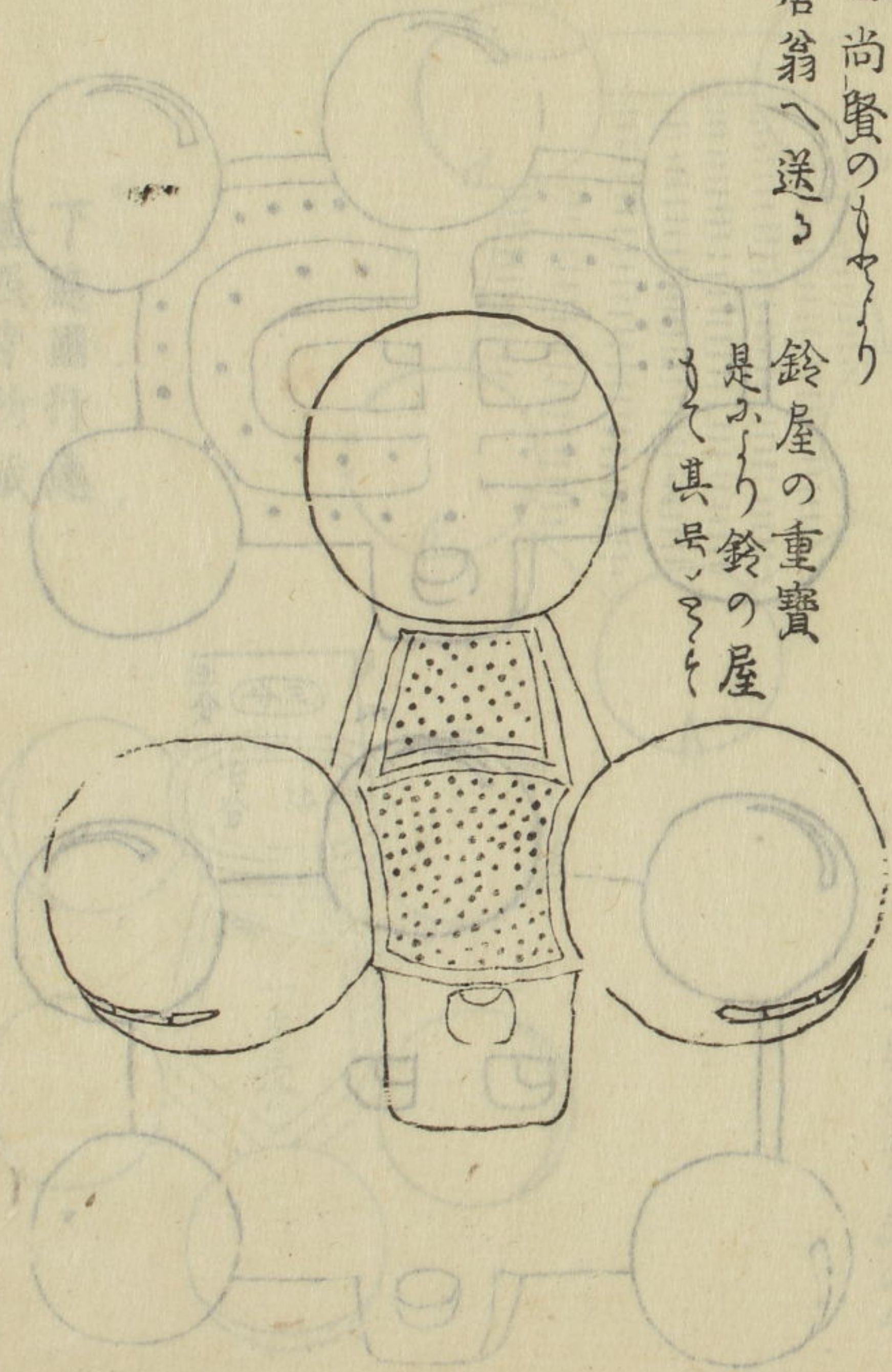
比禮鈴

神武天皇十種神寶ト云
浪花座摩豐受皇太神宮
神寶



五十鈴宮の境内山中より
堀出安永の末蓬萊大失荒
木田尚賢のしやうり
本居翁へ送る

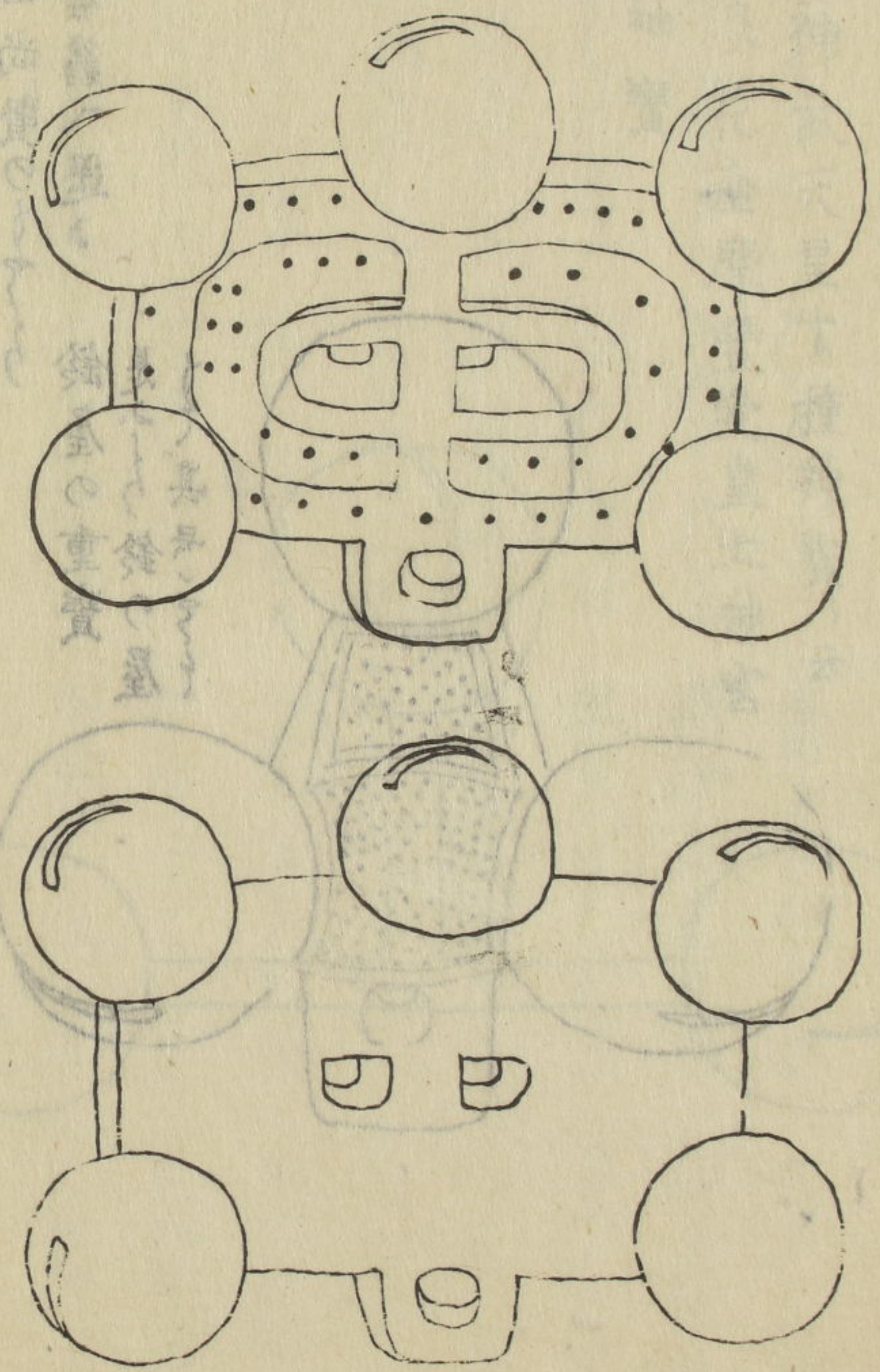
鈴屋の重寶
是より鈴の屋
より其号より



古鐘玉不味國新

古鈴在所不知圖傳之

面之圖

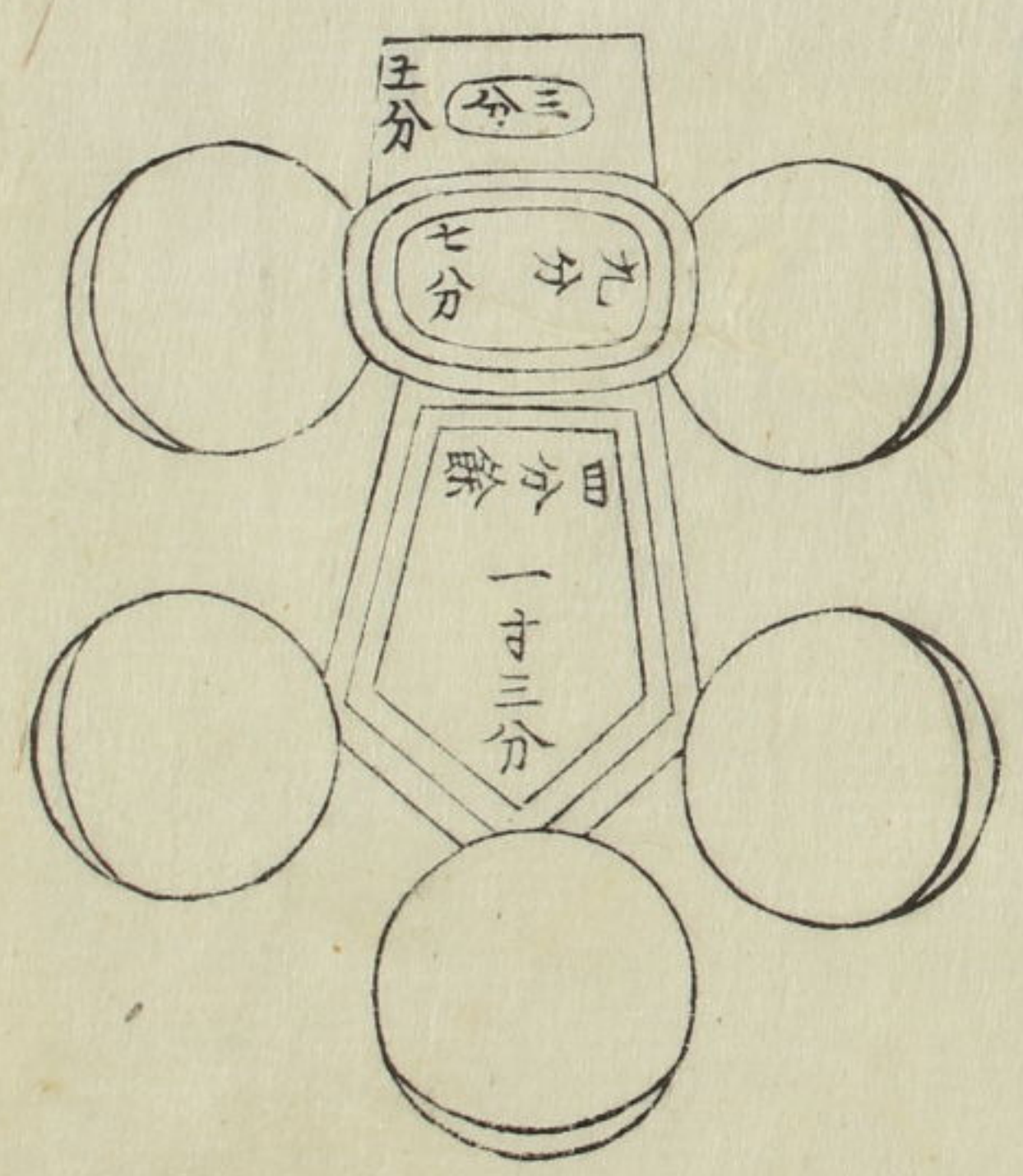


背之圖

本圖は、
出雲の
正十鈴宮の
内山中に
あり

下總国周集郡貞元村
神將寺土中所出
或作準和名抄作維
二字スエトヨシム

下總国行徳
善照寺所蔵



○先年鴨川大水の時三陸のわが下りもびやう
 れとたる物中鹽シラヒ乃大水さうへへうのうへた
 然サビ乃清腐クサリさうあり何は用うものともさう
 ぞまゝ佛具やあんな護摩の燈乃さうふた
 き圖もうへてさうねども何はありさうふた
 らうべうさうさう

○石磨ハ西土うていりてたけよるに成り又集り
華原四濱の勝者と福でられたるありぬ方も
にふりてあふふとべし手へ九龍あふとふりてふりて
一輪あふべし一輪あふりてふりてふりてふりて
やうなふりてふりてふりてふりてふりてふりて
ふりてふりてふりてふりてふりてふりてふりて

札刀に弄る奇案の象として膚の癖の巢をけり
 赤く金銀のどしどし此のあてはけゆく
 ありとある色を赤ふいちさ土の凝りて
 るるものやあて

○陶淵明の菊を詠ふ祖のやうに其の非感し
菊と東籬のやに挿しあはば摘採し食用食用に
充られしを離騷よりニ繁ス秋菊之落英とありふ
却てくけと桓景が重陽にきよに登りて酒を
に漬りヒタ飲み感し元稹が亂華雨中みよとくに
菊をよむところふあはれ此華園ゆき霞にふ花を
しといふもふ貴きにありぬといへり菊は
花の隠者なるものなり茂叔のいふも唯葺中に交ミレハ

○蟬吟有子果羸負之。いづれか聖語うへ非と云ふ
 と云々もまた他の中へ子とて冬落の食料ふ
 ると西云のいづれは是と非と云ふ人ふはいづれふ
 虫の子は半の果羸ふまゝなるところなり愛に信ふより
 の説と云ふれども、東虫の時よふんちて雨湿の閉らて
 にていづれはよき事ふなりと云ふことありきと
 蟬半といふ竹も出さるる竹の葉にてもふ事
 いふてふ事随事ふていふにんていふていふていふて
 耳はちのりもいふていふていふていふていふて
 を術と懼て、信の信と云ふていふていふていふて
 (一) 千載のいふにんていふていふていふていふて
 こと、錦裏詩瓢の如事。りていふていふていふて

の考へたる錦裏の本、賀正詩、毎日出、騎、
 馬、從小、奚奴背、右、錦裏、新得詩、入、囊中、母見
 之曰、是、兒、嘔、出、心、肝、詩、瓢、唐、求、得、詩、投、瓢、中、
 卧、病、投、瓢、于、江、曰、斯、文、苟、不、沉、没、得、者、方、知
 吾、意、耳、至、新、渠、有、講、者、曰、唐、山、人、之、瓢、也。
 ○此本様の書をよくする人江戸に託壽といふは
 大佛清といふものと撰りて大佛敷焼亡の年、に
 寄附するものと一より二人のく細色のいふもの
 ねと然りやわりの非と鑑定乃傳ありて其書の
 門人長坂長春といひ、いづれは寛此本下へ永此本下へ
 是の書も細美なり。長春の書は從のいふものさうぞ
 人なれば彼自筆のまゝとていふていふて

[illegible]

○前編に安覺良祐別人の同人と經引
しと此より二條專念寺現任隆圓上人本願高
僧傳中此師の傳と書うはしめて贈らぬ全く
一人なりと分明なり。其文云。釋良祐号安覺
一名色定。建仁榮西禪師弟也。甫七歲。歸釋
氏。習業。良印學頭。剛記捷穎。種智夙發。讀書
五行並下。操觚千言立成。未盈冠歲。博涉精
通。誦法華四功德之文。始志全藏書寫之願。
奔走四方。紙墨化人。一時緇白資助者多。孳
孳力書。造次不歇。雖行程之間。必具筆硯。筑
之吉原觀音。香椎箱崎。豐之彦山。淡之武島
等之地。遊歷踰遍。踰海在宋。餘十寒燠。暗記

一藏不舍。寸陰還止。筑前田島住。香正寺。新
素願之速成。日詣孔大寺。神胸帶經。案行步
揮筆。承元初年。終功一筆。凡經律論該計其
部六百三十八。其卷二千七百四十五。其帙
二百五十八也。大宮司宗像氏國與祐雅好。
捨財建堂。度神祠側。祐自彫像。守護真典。鎮
西奔膽。香華替禮焉。以某年仲春。祐告徒曰。
望日吾行矣。至期持念誦安座念佛。諸徒圍
繞。及日停午。瑞雲覆院。音樂聞天。祐忽曰。時
至矣。又手當胸辭衆而逝。顏容如生。葬於高
天陵。歲七十三。臘若干夏矣。贊初。鶴林五
露のふと引ひふと。古今一人と。技業焉

その盛美なり。

右高僧傳の看人々さうらに本傳全くと其まう
うふまう譯でば又迎年大典禪師安覺の筆の
解節經八十五行とさう長樂建禪師といふ人乃
うふに跋を加へらるる又小雲棲稿にあり其や
うの文治三年丁未法師二十九。首業華嚴
經。至安貞二年戊子而大藏既已成矣中間
四十二年。中其跋華嚴經有曰。肯釋尊以三
七日。口之。今弟子以九十日筆之。説之。与書
雖異。開悟得脱是同。偉哉斯言。苟非菩薩乘
願輪以格焉。能如是。此跋うもまうに考
うるあり。年紀をうらうにらる。う又右本傳

其年とまうと陰圓上人考て法師年依元己卯
崇生寛永三年卯二月又日述とまう。賜け。他に
香月牛山著安覺辨。伊藤東涯の東燭譚うも出。安
心推散記といふも。うも高僧傳
のうらうら及らる。此高僧傳の元禄十又壬午
崇三月美濃加納盛徳禪寺師資といふ人の著うれ
此傳と安羅門僧正の傳うは。あう力と盡う。育
其凡例に如菩提仙那碑又安覺法師行狀。是搜索
之珍奇。若為神續。則非好古之人矣。とらう
うらう因うに安羅門僧正の傳元す釋書にうや
うう所釋してたに獨に釋書うの釋菩提南天竺
安羅門種うあり。支那五臺うの登り。一時一

光祿に遇ひて之に應じ又珠を拜せんとして
 善くふ祿曰く珠をば今日に誕生せしむ
 して本朝に赴く天平八年七月行基は歸來して
 聖僧と遇るなりとあり 禮部鴻臚雅樂三僚と
 して勅取津に向ふに云はるなり 高僧傳に奉るに
 南都戒壇院所藏阿闍門僧正の碑銘のまゝなり
 傳法弟子修業著と平素隨仕して親しくするに
 一毫の違ひあるべからずなり 先き名字に云ふなり
 釋菩提仙那南天竺人姓婆羅遲。阿闍門種と
 といふなり 天竺より十六國九十六種皆其徳風を
 傳ぎ唐にありても 緇素昇進せしむるを尊く
 五臺山にもよく又殊師利を拜せんとしての一條に

輪像ヲ欲更造ニ八大菩薩像ヲ無常行迫其顛不
請宜共相助畢功矣。弟子等遵遺旨修飾八
像又刻肖像並置大士傍焉。贊へ前に擧ぐるこ
ろと東人寺より難策と捨園丁の仲ふ得るなり。
○親しき僧戒整朱法のついでに時人傳と著
せし日ぬ之和尚と傳ふを以て其の業記と
ふり仮名を降し、妙陸軍に収めんとするも
然れども予義学のふゆゑ流布もさうなほ
はき理義につきわづらひ艱といふも其道識
人に男ありさうそを授けて人を驚く折一
安覺仙那西原のふと縁するふのふとてふは次づ
和尚名は善の妙立いふと唯思ふと号に依姓ハ

了く止觀の外に念佛なりし能所の情の取とるは
法界の智の照とるなりや侍者曰是のこれ即
の用なりや和尚曰吾の平生隠修の具なりや
此の遠近の徒流に垂訓の徳氣平育のよく歎
一四臘十八回人全身を北河の桑の和尚初め
律と學ひし時花中三大部とてむる及び教觀
久に備ふ事とるなりや和尚曰天竺の學に
潛の宗と更なりや和尚曰天竺の還るなりや
四十の天竺一宗の律法なりや和尚曰天竺
これより盛なりや和尚曰天竺の當なりや和尚
の正統なりや和尚曰天竺の當なりや和尚
元來性強記一復法華と悉く背にむる其撰述

やる慶圓頓章句解。十重俗詮。三有門大義
始終心要大義。心經畧解。野山牝集詩偈に
行るなり。嗣靈空律師其志と終る安樂律
院を創建。法流盛なり。和尚の詩其生
涯の志と看ふなり。傳中に記するなり。
多し。幼苦人生。經常悲歲序。徂庭寧俗態。
入寺作禪徒。解慕馬師秀。行飲船子殊。忽忘
機境了。祇與杖鞋俱。說話自茲淡。威儀緣底
拘。要同雲裏鹿。期等霧中鳥。一旦蒙朋諫。多
年究聖謨。升簾驚峯月。落几鶴林珠。初識箇
時菟。不如明處株。興懷禁絲革。發誓護衣盂。
方入宣公域。更遊智者郭。設房隣北嶺。披帙

五、其國を治るるに、
づれ、その是を、
〜、其の、
成、
と説く、

○竹苞鶴鶴氏、
第十六。寶徳元年閏十月三日。長照院竺華
来過。竺華曰。吾翁太椿。築紫人也。少年東遊。
就常州師學。四書五經。始聞孟子講。時食不
足。就人求豆一斗。掛之庖厨。日熟一握。以療
飢耳。如此者凡五旬。後得聞易。語而多資。用
為之。西。飯紫陽。求財於親族。得錢十五貫。因

持。又東遊。遂得易學。云。曰。今時如此。困學
者不復多見之。困田云。困學ハ、
く、
筑紫、
關東、
に、
ふ、
其、
平々、
長、
一、
き、

てはさうづゝのあゝと申へに急^{ラニク}う人いあにどー
○事と類とに平^ヘさめりありあにさる所
あに子類と並へるもいふと強^ハくは四事不可
久^スとして青^{アヲ}真。秋^{アキ}獎。老^{ロウ}健。君^{キミ}寵。此中三事いふ
にさうづゝと君^{キミ}寵にあにさる意と用あに
三利といふふ一^ハ年之利種^{ハク}穀。十^ハ年之利種^{ハク}穀
百^ハ年之利種^{ハク}穀。此意ハ種^{ハク}徳みあにどー
○系ハ類張國史にさるあにさる後^ハけりもさる
ふ人入^ハ系とあにさる梅^ハ尾ハ裁^ハけりさるさる
さる類張國史にさるあにさるあにさる
とあにさる系とあにさる西^ハ土ハ系と採^ハ制さる人といふ
岡田次平さるさる

岡田次平卷之四



雜話

○市^チ蔵^{ゾウ}人野遊^{ノユウ}さるさるさるさる
中^{ナカ}入^ハさるあにさるあにさるあにさる
其^{ソノ}香^カさるさるあにさるあにさるあにさる
さるさるあにさるあにさるあにさるあにさる
さるさるあにさるあにさるあにさるあにさる
息^{イキ}はさるさるあにさるあにさるあにさる
さるさるあにさるあにさるあにさるあにさる

そらうに其水石諸起外に腹中雷鳴一にま
し療むれども驗やあづき谷に大蛇有りや
つにふり其毒に膏く一をんとあつて人考て
右金乃類の鉄を濃く煮て一を煮て一は
平愈せり又蛇の脱皮炭薪ふまれば獨金破る
ものし其の草莖と火に入て焼ば臭もものぢやく
かわりとももさるに隣の家より入りてあ
せり金破れしを二日の間は此方と用はもて金
下に焼くも水いもいそつていれども強ひてこと
及ふり後十余年のころ又同一家にて金金お
のぶり破れしをいふにびいあに草のこゝにこれ
は頻りにあつて水ぬやう其金もいふもびい

とてわど愈つていひにせしは二にたはなり

○草莖をて蜂のしつと極きは血を愈てあが
はる村中の小兒哉ふわづらふ正なる蜂ふ
刺してやうて草莖にそつてあつてもいふ言ひ
づは極して効とせんも又はつて急を効し
あひあつては舟中にて驚かす刺する人あつ
し其折る薬物となくいふにありは便を熱
て其病はうけられれば即ち驚き氣をいふ止り
あれはあつてあつて人の即時の効ふ
○又鼻の刺して毒汁氣血をふ上達して言
はるしあつて死するも刺してあつて死するも
そわいりて極きは綿に針のしと即時に極ま

○但馬豊岡の人鴉鵂カササギなりふふ曰其岡水の
ふといふは橋度美作岡橋に根張ぬ一四箇カの
ふといふは登りて五拾ふふて六十六作の地蔵
よりふり霊験のふりて其藤鶴フナトビ繩ヒモおのふといふの
女童二人といふ一草花屋へふふふふふふの橋へ
ふに長れ七人斗ふおどきふふふたれは氣を指し
ふふ歸るふふふふふふふふふふふふふふふふの
ふふふと従ふふふふふふふふふふふふふふふ
と焚くふふふふ彼者おふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
て身は木より其の色に金の光とぞふふふふふふ
の意龍ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

楊ヤナギふふふふ風情なりふふふふふふふふふふ
乃阿ナふふふ隔ヒキふふ八箇中のふふふふふふ金色なる
が脱キけふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
つふふ悪龍毒地の類にふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

○南都乃人の話ふねはれまをばつふふ桃灯を焚
へふ夜けけふふ光とふふふ飛ふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふてふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

とておぼしきものなりていづかき聲をたてて其庭よりてせ
しるゝとてなりていづかき聲をたてて其庭よりてせし春日那
まゝとて提し提し根をたてていづかき聲をたてて其庭よりてせ
まゝとて提し提し根をたてていづかき聲をたてて其庭よりてせ
眼前より利をたてていづかき聲をたてて其庭よりてせ
停る聲をたてていづかき聲をたてて其庭よりてせ
しるゝとてなりていづかき聲をたてて其庭よりてせ
はとてこれに似ていづかき聲をたてて其庭よりてせ
わけとてなりていづかき聲をたてて其庭よりてせ
角よりてなりていづかき聲をたてて其庭よりてせ
まゝとて提し提し根をたてていづかき聲をたてて其庭よりてせ
とてなりていづかき聲をたてて其庭よりてせ

方々きりりふいふも亦得やとていづかき聲をたてて其庭よりてせ
價値さるゝ

○凡そ智の才にせむ才は事ふ難ひあつていづかき聲をたてて其庭よりてせ
まゝとて提し提し根をたてていづかき聲をたてて其庭よりてせ
はとてこれに似ていづかき聲をたてて其庭よりてせ
わけとてなりていづかき聲をたてて其庭よりてせ
角よりてなりていづかき聲をたてて其庭よりてせ
まゝとて提し提し根をたてていづかき聲をたてて其庭よりてせ
とてなりていづかき聲をたてて其庭よりてせ
千里の馬を鞭ひて指し指し根をたてていづかき聲をたてて其庭よりてせ

も人道のふりや一隅とのみ寺の権板漢のきこへ
○東福寺同山のやまに癡元坊といふ道人は
ていつくか戒律僧本法とせむと佛制の
法并瓦鉢を用ひしものなりふ癡元坊と
何ぞは義のふりや一隅とのみ寺の権板漢のきこへ
○あつたにふは愛想園師の才子とてさふゆふ
三つのおづつと桶の底をひて水をぬぐぬぐと
さふゆふとぬぐぬぐとぬぐぬぐとぬぐぬぐと
ぬぐぬぐのゆふとぬぐぬぐのゆふとぬぐぬぐのゆふと
想ふゆふとぬぐぬぐのゆふとぬぐぬぐのゆふと
○元亨釋書に著者虎閑禪師の其又徽官をりしふ小僧

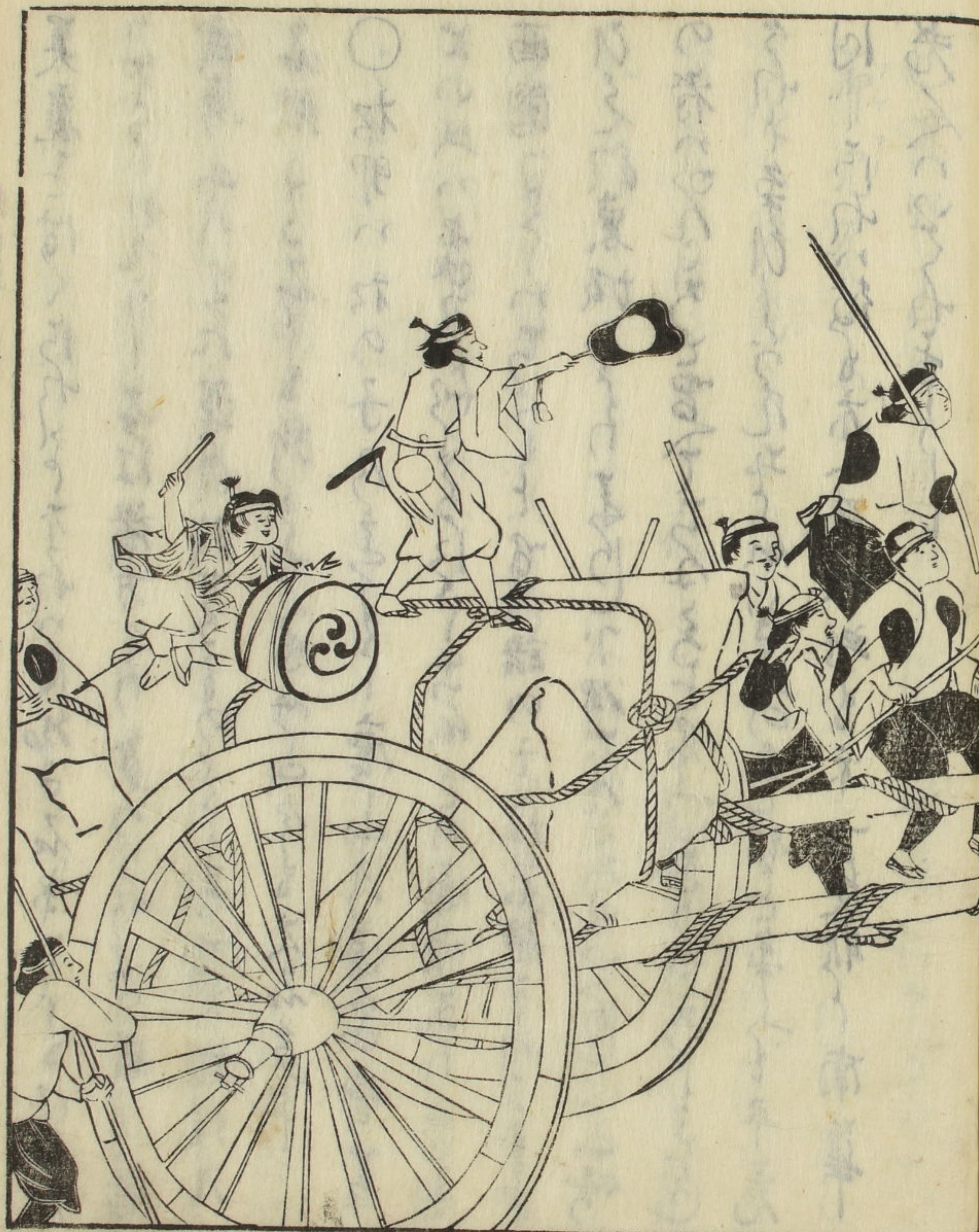
のつ官家乃童子達を教ふのはつと又の徽官をりし
船のゆふとぬぐぬぐのゆふとぬぐぬぐのゆふと
大中の息をりしと虎閑のゆふと大聖釋と佛の
は孫師鎌とぬぐぬぐのゆふと一はは飛越とぬぐぬぐ
なつと止つとやと

○聖德太子のゆふとぬぐぬぐのゆふと一はは飛越とぬぐぬぐ
説にゆふと其日十二月朔日かぬふの達磨とぬぐぬぐのゆふと
と虎閑談とぬぐぬぐのゆふと一はは飛越とぬぐぬぐ
とぬぐぬぐのゆふと東福寺中興院派のゆふとぬぐぬぐのゆふと
ぬぐぬぐのゆふと或説ふと休善派とぬぐぬぐのゆふと
ぬぐぬぐのゆふと異人といふとぬぐぬぐのゆふと
ぬぐぬぐのゆふとぬぐぬぐのゆふとぬぐぬぐのゆふと

新刊の必曲る所を行めこゝの如くありこゝろに
○路を行くまゝのふたにありて常の禮あり
て一ふが牛馬にはまきのひれも其付くる方ふ當
まはあやかしきなり然るふ薩摩のまゝていふま
自^{ミツカン}日の出るといひ日没とくは禮を冬はふれ
及ていふも路を禮するの禮なりなりとて又い
づこの國のまゝなり路をまゝとて書くとてや
りやふいふまゝの如くはなかりなり

○平らなまはしり傳ふるな画よをよとある哉
そとく人殺半國あり大佛あり石垣あり石と界
あり町の國といふくもあり又あるいふれあり
画なり代傳より又年をとりやとあるもいふなり

城乃石りけ城をよもやむりのうぬとにアもれ
 城普清うもやもやわが城乃様といはひのじ
 唯路うもや大佛をみちもき人うもや親云
 大佛殿の石をきうもや東の方より来るもの
 是のうもや松好のまき難難なりうもや加藤
 清正音頭とよりうもや松好うもややうもや親ひと
 やうもや貴らやうもやうもやうもや通うもやうも
 を伊賀の松好とみけうもやは田名うもや彼名
 うもやゆもやあやまるうもやうもや花をき車この
 童子のにぬるき人ぬ一やうのもうもやうもやうも
 に一なりは親をうもやうもやうもや一因うもや此國を
 小安と大佛殿乃経営もや金張の費と麻のど



○武儒士其母に仕へて孝と盡しむるも
ありきまはつづめいふむひききふんこふほ
一やめいふまふいふふにうわいふむひき
坪いふふあふむひてふいふいづいふふひはん
くは一日の晩ういふふのふいふいふいふ國では
いふふふふいふいふいふいふいふいふいふ
相識一老人も其男の謹慎に似て圭角あふいふ
そふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
○享和二年十二月の末はういふ甲斐國郡下町
見村の氏姓いふいふいふ其隣人の黄痘に罹
くふいふ兩親ふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふ病を愈いふいふいふいふいふ病

日曜いふいふいふいふいふいふいふいふいふ
里程いふいふ駿河の原いふいふいふいふいふ
まはにふいふの街道いふいふいふいふいふいふ
二三人中具いふいふの遠先いふいふいふいふいふ
床いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
農氏いふいふいふいふいふ農氏いふいふいふいふ
は畑いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
林いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
のは葉いふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

第一 序言
 第二 第一章 緒言
 第三 第二章 研究の目的
 第四 第三章 研究の方法
 第五 第四章 研究の結果
 第六 第五章 研究の結論
 第七 第六章 研究の意義
 第八 第七章 研究の展望
 第九 第八章 研究の参考文献
 第十 第九章 研究の謝辞
 第十一 第十章 研究の発表

十二 第十一章 研究の発表
 十三 第十二章 研究の発表
 十四 第十三章 研究の発表
 十五 第十四章 研究の発表
 十六 第十五章 研究の発表
 十七 第十六章 研究の発表
 十八 第十七章 研究の発表
 十九 第十八章 研究の発表
 二十 第十九章 研究の発表
 二十一 第二十章 研究の発表
 二十二 第二十一章 研究の発表
 二十三 第二十二章 研究の発表
 二十四 第二十三章 研究の発表
 二十五 第二十四章 研究の発表
 二十六 第二十五章 研究の発表
 二十七 第二十六章 研究の発表
 二十八 第二十七章 研究の発表
 二十九 第二十八章 研究の発表
 三十 第二十九章 研究の発表
 三十一 第三十章 研究の発表
 三十二 第三十一章 研究の発表
 三十三 第三十二章 研究の発表
 三十四 第三十三章 研究の発表
 三十五 第三十四章 研究の発表
 三十六 第三十五章 研究の発表
 三十七 第三十六章 研究の発表
 三十八 第三十七章 研究の発表
 三十九 第三十八章 研究の発表
 四十 第三十九章 研究の発表
 四十一 第四十章 研究の発表
 四十二 第四十一章 研究の発表
 四十三 第四十二章 研究の発表
 四十四 第四十三章 研究の発表
 四十五 第四十四章 研究の発表
 四十六 第四十五章 研究の発表
 四十七 第四十六章 研究の発表
 四十八 第四十七章 研究の発表
 四十九 第四十八章 研究の発表
 五十 第四十九章 研究の発表
 五十一 第五十章 研究の発表
 五十二 第五十一章 研究の発表
 五十三 第五十二章 研究の発表
 五十四 第五十三章 研究の発表
 五十五 第五十四章 研究の発表
 五十六 第五十五章 研究の発表
 五十七 第五十六章 研究の発表
 五十八 第五十七章 研究の発表
 五十九 第五十八章 研究の発表
 六十 第五十九章 研究の発表
 六十一 第六十章 研究の発表
 六十二 第六十一章 研究の発表
 六十三 第六十二章 研究の発表
 六十四 第六十三章 研究の発表
 六十五 第六十四章 研究の発表
 六十六 第六十五章 研究の発表
 六十七 第六十六章 研究の発表
 六十八 第六十七章 研究の発表
 六十九 第六十八章 研究の発表
 七十 第六十九章 研究の発表
 七十一 第七十章 研究の発表
 七十二 第七十一章 研究の発表
 七十三 第七十二章 研究の発表
 七十四 第七十三章 研究の発表
 七十五 第七十四章 研究の発表
 七十六 第七十五章 研究の発表
 七十七 第七十六章 研究の発表
 七十八 第七十七章 研究の発表
 七十九 第七十八章 研究の発表
 八十 第七十九章 研究の発表
 八十一 第八十章 研究の発表
 八十二 第八十一章 研究の発表
 八十三 第八十二章 研究の発表
 八十四 第八十三章 研究の発表
 八十五 第八十四章 研究の発表
 八十六 第八十五章 研究の発表
 八十七 第八十六章 研究の発表
 八十八 第八十七章 研究の発表
 八十九 第八十八章 研究の発表
 九十 第八十九章 研究の発表
 九十一 第九十章 研究の発表
 九十二 第九十一章 研究の発表
 九十三 第九十二章 研究の発表
 九十四 第九十三章 研究の発表
 九十五 第九十四章 研究の発表
 九十六 第九十五章 研究の発表
 九十七 第九十六章 研究の発表
 九十八 第九十七章 研究の発表
 九十九 第九十八章 研究の発表
 一百 第九十九章 研究の発表
 一百一 第一百章 研究の発表

○あつきのまゝに母の親方養のうゑに
あつきのまゝに母の親方養のうゑに
あつきのまゝに母の親方養のうゑに
あつきのまゝに母の親方養のうゑに
あつきのまゝに母の親方養のうゑに
あつきのまゝに母の親方養のうゑに
あつきのまゝに母の親方養のうゑに
あつきのまゝに母の親方養のうゑに
あつきのまゝに母の親方養のうゑに
あつきのまゝに母の親方養のうゑに

○栗田にやうに刑せし者馬よりりし
栗田にやうに刑せし者馬よりりし
栗田にやうに刑せし者馬よりりし
栗田にやうに刑せし者馬よりりし
栗田にやうに刑せし者馬よりりし
栗田にやうに刑せし者馬よりりし
栗田にやうに刑せし者馬よりりし
栗田にやうに刑せし者馬よりりし
栗田にやうに刑せし者馬よりりし
栗田にやうに刑せし者馬よりりし

○え様の比り年まらぬふりし
え様の比り年まらぬふりし
え様の比り年まらぬふりし
え様の比り年まらぬふりし
え様の比り年まらぬふりし
え様の比り年まらぬふりし
え様の比り年まらぬふりし
え様の比り年まらぬふりし
え様の比り年まらぬふりし
え様の比り年まらぬふりし

まゐりてゐてなれりとせし病人の按腹する間
物陰うゝまゝ筆と弾ヒカしむ按腹のんを認めて
なぐりてなれりといふも是はもろくもて蘇合樂
を吹くは焼く藥を蘇合園といふ故事よりみえ
しるししは酒過者のこと止らりしといふべし
○いましゐるものはつた祥世乃詩奇のいふ
る人の目態やうのいふやういふやういふやう
たうといふたうのいふやういふやういふやう
しやうといふやういふやういふやういふやう
にに齋先生武寺のた徳の祥世の領とんのかく
斜サナにふやう象ゾウもたうやういふやういふやう
ちやうといふやういふやういふやういふやう
意し祥家の例に

て知識といふほどの人いふやうと祥世の領い
予うたうたうたうたうたうたうたうたう
日まゝと記されしとまゝとたうたうたうたう
したうたうたうたうたうたうたうたうたう
酒いふやうの境界いふやういふやういふやう
しゐるやういふやうに本津の里乃祥院の住僧を
に院のいふやういふやうとたうたうたうたう
み法衣を改め祥世乃領とて端座し入寂
とたうたう其寺へ後りふはせし僧夏のいふやう
ぬ帳乃内にありたうたうたうたうたうたう
そきと人坊をたり後任意とまりまゐる人
たうたういふやういふやういふやういふやう
臨末乃形相に意解して

○赤穂の難ふ不義——と述べて大野某の女東
備前浦某に嫁し居るを其父某の何れぞう
伯長の家より空比に隠居といふ年々元來孫乃
分限もたも貧乏なりたるふいふ言ひも老に及ぶ所云
差れりなり其妻疎めたりともありやて
^{キカス}不羣に良雄とけり四十餘士復讐の^{マクレウ}
^{カタキウチ}一りと孫びぬるなり其人数の多と病と賣
ありき——中に大野氏のとくはふまゝにいり一旦裸
ひらき棄り此復讐を催しやうやちも疑ひそ
ふふいふ名もあつた其女も人知れずさ
落りてうちみえに家までいづつていづつて
ありて下婢といふていづつてわがやうな顔

いふもきつひりの事其月に罷あふはる候義
にふて遠にちこにわを彼は姫^{ひめ}ませといふもいふ
ふもいふ一^{ヤモメ}生^{ヤモメ}候て果さるべきも一^{ヤモメ}度^{ヤモメ}候て
後あてはよは妻^{ウカ}あひて言ひつゝいふもいふ
ふもいふと障^{サヤ}ふとて同^{サヤ}あはやういふもいふ
候に候^{サヤ}候て^{サヤ}其^{サヤ}常^{サヤ}操^{サヤ}安^{サヤ}よに候て
きこい候て^{サヤ}其^{サヤ}隣^{サヤ}固^{サヤ}備^{サヤ}後^{サヤ}の^{サヤ}人^{サヤ}坂^{サヤ}ふ才^{サヤ}胞^{サヤ}と
筆^{サヤ}記^{サヤ}に^{サヤ}んも

○又ふく人曰赤穂の政勢大野氏と席^{レタレニ}ふと
いふもいふは^{トチタテ}いふ^{トチタテ}武^{トチタテ}其^{トチタテ}衆^{トチタテ}欽^{トチタテ}に^{トチタテ}は^{トチタテ}は
同^{トチタテ}事^{トチタテ}起^{トチタテ}り^{トチタテ}候^{トチタテ}と^{トチタテ}除^{トチタテ}せ^{トチタテ}る^{トチタテ}に^{トチタテ}は^{トチタテ}い^{トチタテ}ふ^{トチタテ}民^{トチタテ}人^{トチタテ}き^{トチタテ}ふ
并^{トチタテ}に^{トチタテ}衆^{トチタテ}を^{トチタテ}に^{トチタテ}候^{トチタテ}と^{トチタテ}張^{トチタテ}る^{トチタテ}い^{トチタテ}ふ^{トチタテ}人^{トチタテ}名^{トチタテ}氏^{トチタテ}を^{トチタテ}て^{トチタテ}事^{トチタテ}を^{トチタテ}

謀^{トチタテ}り^{トチタテ}迫^{トチタテ}る^{トチタテ}時^{トチタテ}に^{トチタテ}信^{トチタテ}と^{トチタテ}わ^{トチタテ}し^{トチタテ}金^{トチタテ}銀^{トチタテ}を^{トチタテ}と^{トチタテ}め^{トチタテ}さ^{トチタテ}る^{トチタテ}
に^{トチタテ}返^{トチタテ}辨^{トチタテ}せ^{トチタテ}り^{トチタテ}と^{トチタテ}い^{トチタテ}ふ^{トチタテ}人^{トチタテ}き^{トチタテ}ふ^{トチタテ}武^{トチタテ}其^{トチタテ}衆^{トチタテ}欽^{トチタテ}に^{トチタテ}は^{トチタテ}は
は^{トチタテ}い^{トチタテ}ふ^{トチタテ}人^{トチタテ}名^{トチタテ}氏^{トチタテ}を^{トチタテ}て^{トチタテ}事^{トチタテ}を^{トチタテ}
と^{トチタテ}わ^{トチタテ}さ^{トチタテ}る^{トチタテ}人^{トチタテ}名^{トチタテ}氏^{トチタテ}を^{トチタテ}て^{トチタテ}事^{トチタテ}を^{トチタテ}
度^{トチタテ}も^{トチタテ}に^{トチタテ}い^{トチタテ}ふ^{トチタテ}人^{トチタテ}名^{トチタテ}氏^{トチタテ}を^{トチタテ}て^{トチタテ}事^{トチタテ}を^{トチタテ}
人^{トチタテ}名^{トチタテ}氏^{トチタテ}を^{トチタテ}て^{トチタテ}事^{トチタテ}を^{トチタテ}
は^{トチタテ}い^{トチタテ}ふ^{トチタテ}人^{トチタテ}名^{トチタテ}氏^{トチタテ}を^{トチタテ}て^{トチタテ}事^{トチタテ}を^{トチタテ}
節^{トチタテ}と^{トチタテ}願^{トチタテ}ひ^{トチタテ}て^{トチタテ}候^{トチタテ}と^{トチタテ}い^{トチタテ}ふ^{トチタテ}人^{トチタテ}名^{トチタテ}氏^{トチタテ}を^{トチタテ}て^{トチタテ}事^{トチタテ}を^{トチタテ}

○良^{オコ}雄^{オコ}を^{オコ}京^{オコ}中^{オコ}の^{オコ}所^{オコ}に^{オコ}い^{オコ}ふ^{オコ}人^{オコ}皆^{オコ}死^{オコ}に^{オコ}し^{オコ}て^{オコ}さ^{オコ}る^{オコ}斗^{オコ}
ふ^{オコ}武^{オコ}智^{オコ}あ^{オコ}る^{オコ}人^{オコ}も^{オコ}復^{オコ}讐^{オコ}の^{オコ}い^{オコ}ふ^{オコ}斗^{オコ}
まり^{オコ}に^{オコ}人^{オコ}は^{オコ}排^{オコ}謫^{オコ}せ^{オコ}り^{オコ}其^{オコ}い^{オコ}ふ^{オコ}斗^{オコ}
い^{オコ}ふ^{オコ}人^{オコ}は^{オコ}い^{オコ}ふ^{オコ}斗^{オコ}
い^{オコ}ふ^{オコ}人^{オコ}は^{オコ}い^{オコ}ふ^{オコ}斗^{オコ}

や諸君にたりてまはる其謀のほうりしと感ぜし又
或人いふは魔を爲る後官の解とあることありてふ
徳を誓ひていふこと良確なるは付て儒學は軍學
ともまはるなりと云ふにあらん

○明智九郎を助坂本の城を落し得る時責めの池
に入に長き舟に乗りて「あゝ」と云ふことありて
深更より海下に付て居りて時爽に及びた馬に
寄るもの様みよとんとみひき橋にのりてこの長
き舟と云ふ舟に乗りて「あゝ」と云ふことあり
てその人入に殿の舟に乗りて「あゝ」と云ふこと
あり「あゝ」と云ふことありと云ふことあり
并、特のことにあらんは思惟せしむるに日なり武

と違ふことありて度々の功名に下のこと
あり「あゝ」と云ふことありて今日の世に
も同じ事ありて「あゝ」と云ふことあり
て子孫と相續するに「あゝ」と云ふことあり
あり得るものなりと云ふことありて「あゝ」と
云ふことありて「あゝ」と云ふことありて
と舊交親切と謝し其謀に保んといひてやうて
皮袋に入るる黄金と橋より釣ゆると云ふこと
ありて身みづかきと云ふことありて「あゝ」と
云ふことありて「あゝ」と云ふことありて
に居るものなりと云ふことありて「あゝ」と
云ふことありて「あゝ」と云ふことありて
「あゝ」と云ふことありて「あゝ」と云ふことあり
て「あゝ」と云ふことありて「あゝ」と云ふことあり

いりーへ波ね永弾^{コセ}ぶが^{コセ}清^{コセ}あよりやいふ名物の
ふきとち、ぬりてたしよつと、いふちりしき志のく
とやのもらへみ入にが一件と武軍記に詳してこ
りりいりもたれども武士のふ意にいふと評
なり、ふもふれどもふいふと、士のふいふ義
ふもて周旋^{シラセン}ふふと其代の内情きふいふ方ふ
てふは敵とつる唯功利との眼にうけてふもて
と盛る死もそ死と得ど言ふの相残害ふふ
ふいふふれどもふれつた馬ふみふ諫ふり入に
がほつても偶ふ非ふふつる沢為友の恩にふりて
陶米ふに倣^{ナラ}つふいふふなり
○百斗^{ハクト}填るが祀にいふに蘭亭ふふふふあり

詩と終る盲人ありふとふふ酒意と物ぬき
やう中へふふふ得ふりけん鎌倉教恩ふふ付
れとふし重衡ふふ十壽のふと遊宴ふふふと
得ふ秘飛せりふとふのふ血ふふふ内かふふ
ふふふ中へ梅華のふ詩繪ありふふもふ不飽^{マカス}
弱^{ヤカ}鎌倉とふひ付ふ尋常ふふふいふ面白ふ
ふ鎌倉にふりふ館二郎の強とふふきふ其弱
鎌とふふふふふ忽雷雨ふふりふれと怪^{アヤ}ふも
懼^{オソ}ふふふふ帰ふふふ酒意ふふふふふふ
ふふ其月ふりふふひ何のふもふふ死せり於
ふふの墓ふふふふふふふふふふの勇士ふ
墳^{ツツミ}ふふふ育ふ詩章の巧ふふふ傳^{デン}ふてのふ非

[illegible]

中々うまれしにや長きふ保ひ才智多し
 中々好しきありしに保ひと南氏と鶴津見と号
 うれ祿百六十石とふられし子孫今ありと先
 年京局と名ふ鶴見七郎次とつひ一人の子孫
 とも和泉堺に旭達社といふ浄土のふれ岡田玄
 恕といふ鶴見のふれとゆかりし人となつたふれ
 ふれと京田と東土と良辨といふも同じき傳説
 ○鶴乃岡といふ岡田といふふれとあり又年ふ
 にふし加賀のふれにむすひし浪士人きん
 掴まといふ中といふふれ二町中といふふれ
 ともふれふれ中といふふれ大島といふ掴ま
 といふふれ中といふふれとて腰刀と名てはう

ころろと切つゝふら／＼敷し片^{ツバサ}翼と切てゐるが
 片／＼と吾方^{ミヅウミ}渡る／＼にふ飾^{カサ}なり幸^{カサ}じとや
 ひとわりて人よあひ／＼に共^{ツキ}笑とんそて人よ畏
 る／＼は其^{ツキ}る細と／＼り／＼に／＼こは／＼い／＼こ／＼と
 へは霜^{ツキ}根の陽^{ツキ}をち／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と
 終^{ツキ}二^{ツキ}の中ふま／＼ふま／＼舞^{ツキ}ひのけち／＼と／＼と／＼と
 にお／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と
 体^{ツキ}／＼／＼に／＼に／＼に／＼に／＼に／＼に／＼に／＼に／＼に
 圓^{ツキ}／＼／＼に／＼に／＼に／＼に／＼に／＼に／＼に／＼に／＼に
 一^{ツキ}ふ／＼／＼に／＼に／＼に／＼に／＼に／＼に／＼に／＼に／＼に
 ち／＼／＼に／＼に／＼に／＼に／＼に／＼に／＼に／＼に／＼に
 ま／＼／＼に／＼に／＼に／＼に／＼に／＼に／＼に／＼に／＼に

てはあつてゐるなほわはちもよく食ふれ
 一に葦をたふはたつては鷹の食ふると今世
 民のわと食ふとちいさく顔もまゝにほめり
 あゝも運の利と射のなまゝに下駄ふすの事よ
 も眼を光らして探るゝとぞサウリ猫鳥獣にふく
 しての年にもなりぬ

○お早紀と早下りる山登る者ゝのついで
 しては宿寺の下にほく猫降決地甚とこひ
 みる飛もともくうらあせつはそ道ヤミね
 家ガへくつねへ一羽をとりてく入
 へふまほけは家親美藤の女よありて
 おやへくねどもほひゆへふ金明神キミヤまう次

なづかひのわも昔よりく一に彼女カミ泣くせ
 晩ヨルミとくわを眼めくありうとあゝと
 帰るめぬ殺せとより農業とはむにわもは
 の罪にふりてわはくあゝ足腰不ス起子の二人
 一も一人の早下り一人の病ヤミ癪くくおれまゝ
 なるもいり常に見聞はるゝか又離カミのま
 ちのひねとくせづるまゝにらるゝ道あり
 ○謝罪し謝ねる利は丈夫の事ぬ鬼神の母あ
 ちのゝまゝして信鬼神のよまのゝ事とくし
 ちのゝいり九理學家のつゝな及びかゝるま
 ちの事とくなふ人のか佛のめとめりて婦女の
 のまゝにふりてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

市が視るころ二十余年の機織金具罷罷
 まうて一匹はひる新馬のかに駒一と馬居入
 わたはあざたといふにふりひに折うて請じ
 くひさしと此處ふ某の村 新とせうと 遺 ちと に馬乃難産
 あそきしとさふとありに此市にわつ請一平
 らうにきしとさふとありに駒いさふとさふと
 がやうとさふとさふとさふとさふとさふと
 ちとてわつ請とさふとさふとさふとさふと
 こにまわつとさふとさふとさふとさふと
 こにまわつとさふとさふとさふとさふと
 他 いふ も いふ といふとさふとさふとさふと
 といふと

○やうう橋経亮の年紀とく一に慈澤先解
 けりう藤樹先解にまゐるうけり慈澤氏
 皆く入るうけりは新馬のかに駒一と馬居入
 やいといふと藤樹とく一に
 うううううううう藤樹先解とく一に
 藤樹乃末孫中に久保といふ人のあつたりと
 ○又これとく一に寛政のけり清水外上坊
 湯のけり南清岡寺にいつる下町の地より
 赤井の所僧に酒樓とけりといふとさふと
 某乃坊とけりといふとさふとさふと
 に石橋のどきといふとさふとさふと
 といふと

ちてふ暴病^{オウニヤク}と傳へ片づくに死たりと云ふを
 らねども源平盛衰記に所謂怪獸一竹と埋りし
 塚外遠なるべきと後世其立所を失ひしは
 其所^{スリ}を必其祟成べしといふ人ありや
 といふと土と腐^{オホ}れ穢^{スリ}るものくに塚と云ふ
 ちてふ所の祖と載せぬ乃南方に小池とありて
 竹もそとて一竹をくば六百餘石と云ふは
 ちて邪祟と云ふを懼るるに似たりと云ふ

松按南殿に鶴^{ツル}のまゝ一もといふは
 と平清盛の傳に依たりし作にさうして
 て述べてなり唐覽^唐を考ふる毛朱^唐

南臺の井とて中に幾つ清水の泉と云ふ
 そり井の傳に勅使まゝ宣令と云ふは毛朱
 一井端といふは則是なりと云ふ
 頼政乃射しつゝ鶴のまゝに然るに清水の
 岡を削りて井と云ふは三年級の下段に
 雲やうふと云ふ堂のまゝなり高田と云ふ
 所なり土人の説ありと云ふ名勝志に云ふ
 名跡志にも清水乃井より西なりと云ふ
 南側人家の西に東西一町余廣く清水の岡
 ありといふなり一井端は同く盛衰記と云
 ふなりと云ふなり一井端といふ處
 大にうゑり果て一井端と云ふなり

極ありはる廟カハヤはゆきつ廟うて火あり身いゝふ
くく廟へ焼失りりやふ月廿日やうて某のきり
あり彼怪火のつら尾ふなりてそに入一は
に廿日夜類とえきつてふなりぬに宅なり
一が例の火あり其家より近隣連焼廿七軒
に及びり自つてぬきつて一口もぬきつてぬ
其は善光寺へ詣んてちかりてぞいふや
しにふきつてぬきつてぬきつてぬきつてぬ
聲より其聲し眞實の者なりしうても女きり
てこれとち火ヒンカある通ふ男より一はつにふ其
ちこれとち男より一はつにぬきつてぬきつてぬ
うきふきふきふきのぬきつてぬきつてぬきつてぬ

家より一やきつて廟へゆきつてふ圍燈は
よりかきつてぬきつてぬきつてぬきつてぬ
そふいありて女よりなりしはこれの男と殺すふ
罪せむと男よりありてぬきつてぬきつてぬ
きつてぬきつてぬきつてぬきつてぬきつてぬ
念ふてぬきつてぬきつてぬきつてぬきつてぬ
つてぬきつてぬきつてぬきつてぬきつてぬ
○門人某某語する奇事鳥丸四條街は近江を某
やうに織くありて妹女同街後小路同織某へ嫁し
たりゆきやうある女とぬきつてぬきつてぬ
美色なりゆきありて難とはふてふと難縁
と女ぬく怨ミ縁きふとふとふと親の家へ

奇特ありきうして彼病人とてこの通りの一七箇日
 前後ともその法をくも神道者よりきくればけり
 戸口に番燭を焚くして何やん香と煙を燐とる
 とうあつて病人の体も其煙よりと霞へハ起
 こもやのどしけでいづるごとく責らるゝの苦々
 此作のまうとてつては験るゝ神道者も解
 うりそはつてぬ死せるつ死体全氣をたかりて
 腐るゝとてけりる某の家のねにたかりてせん
 たりとて入る家も人に裏つたりされも某
 けんみもせはつてぬふといふなりとて
 ○鳥獸を殺すのあききひきりて人の意を恨
 めあつて其業を妨げやうの術をたて

とのけきとてぬくありやふ金佛者より歌は
 一たりふもあり學者よりねの逞き人あり
 道ともく私くともあらむ天刑といふ
 ○江南乃舊にむくうつて根ある土地と
 うればむくうつてふりふりふりふり
 氣乃ふくうて氣味とてまぶるゝあり此
 近に伊や山の葡萄と得り象圖に根乃果
 細く尾ねくうてふりふり根と俗稱と此物
 信養屎尿乃力と借む自然生う辛辣比
 類なく潤味とぬむ人は人に貴氣にふり
 船より他方におくれば氣味大ふ減る陰
 ありふのまうなりといふこれ水氣に觸る故なり

ぐー人は氣血順流せるかゝに能はざるはあ
 然と氣に激カシして病むは猶み難きを仮めん
 凡そ暑湿シツシツも意を司もぶふとあり又縁より
 まる善惡の端サカなりとも因り果ぶるは金
 錢とて忽ち盛ふと衰ふともあるべし美色
 とてたゞふ慾念を發するはああるべし欲ボリ
 するふともんがれは意を迷はるゝゆゑとて親
 聽サカひ避へべき道を唯ひり開きとてせむべし

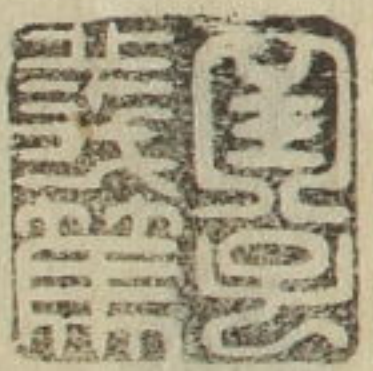
而語于言外亦翁之本也也生非也世故
不徒以文藻之錄意耶今茲閑田次筆成
翁之令嗣直樹子請來改焉余昔在暇時
遊于禪刹之中因與翁相識翁之傍寔空宗
打破漆桶實為奇特之一莫逆余亦具於
園又屬情東望之鄉竟受辱不敏也翁筆
今年於古稀已過三冬余之近年每春

為尚國會也以翁為三味之賓余於翁有
如是之契豈可然而已哉於是乎書數言
以答其厚

文化二年乙丑冬十一月

金子義萬書

于風竹軒





[Faint, illegible handwritten text in cursive script, likely bleed-through from the reverse side.]



享和元年辛酉春三月刊行

林伊兵衛

木村吉右衛門

齋藤莊兵衛

鷗鷯惣四郎

平安書肆

26
1783

